

# 英国地方史研究文献(二)

——イースト・ライディング・オヴ・ヨークシアの場合——

越 智 武 臣

筆者が「英国地方史研究文献」(一)と題して、本誌上にその一部を  
発表してから、すでに二年の日子が流れた(『史料』四三の六)。尻  
切れトンボでおく気はなく、完成させねば、と思うゾレンは  
あり余るほどあったのだが、英国でも、そのまた僻遠の地、イース  
ト・ライディング・オヴ・ヨークシアの地方史研究といえは、筆者  
にはともかく、大方の読者にとっては、文字通り「遙かな昔、遠い  
国」のことである。独りよがりのペダントリになりはしないか、そん  
な懸念もなくはなかった。もともと大きなこと——むつかしく問題  
意識といっておこう——を考えながら、この研究に分け入ったのだ  
が、はっきりいって、僻遠の地は僻遠の地であった、そういう自分  
自身の印象もなくはない。結果は、また自分の関心を、もっと大き  
な問題につれもどすこととなった。稿の続行に、なんとなく筆の重  
さを感じた理由があるとすれば、そうだったといっておこう。しか  
し、編集部からせかれるまでもなく、ことがらの性質上、完成させ

ねばならぬ、ということとは至上命題であり、また、考えてみれば、  
管見の向うにあった対象が、たまたまこの地方であったということ  
も、いまとなつては、かけがえのないことだったように思う。スー  
パーマンでもないかぎり、誰だって、現に狭い四壁のなかで、広い  
世界も感じれば、人生も感じているではないか。とにかく、筆者は  
ここを通して、自分なりの英国像を描き、大英帝国の一端をも感じ  
たはずだ。とすれば、この続編も、その狭い四壁の過去だと思えば  
よい。真空の試験管のなかよりは、まだしもましだったはずである。  
同学の便ともなれば、なおさら望外のことであろう。おくれたこと  
をおわびしつつ、章別は前稿を追う意味で、第四章から始めること  
にする。

## 四 近・現代史文献

第三章で扱った、テューダー・ステュアート史関係文献にくらべ、

また第二章の中世史関係文献にくらべ、近・現代史研究の文献数とすれば、当然多くなるのが常識であるにかかわらず、当地方においては、その数が至って少なくなる。こうした文献数の少なさを加減は、近代になって、にわか魅力と役割とを減ずる、この地方の運命と無関係ではなさうである。近代における地方の発展は、いっまでもなく産業革命とともにある。そして、その申し子交通の便不便と関係することは、日常われわれの周囲にもみることである。この点、最近「経済史研究の盲点」として、鉄道史研究の必要を力説された、小松芳喬教授の卓見を想起しておきたい。<sup>\*</sup>これはまた、地方史研究についてもいえることである。いっまでもなく、英国鉄道幹線のひとつ North-Midland 線は、ドンカスターからヨークへと北走することによって、このイースト・ライディングという土地を置きかりにした。百の理窟を並べてみても、ズバリこの一事が、地方の隆替に及ぼした影響の程度を、肩代りできるものではない。近年地方史家が、鉄道史にことさらな関心を抱く理由がここにある。マクマホン氏と云えば、「イースト・ヨークシア地方史学会」の主宰、ハル大学成人教育学部のテューターでもあり、まず当ライディングの地方史学を代表する少壮学徒であるが、この人の専攻領域が鉄道史であるということをご記憶にとめておきたい。K. A. MacMahon, *The Beginnings of the East Yorkshire Railways* (E. Y. L. H. S.,

no. 3 1953) は彼の代表作であり、とくにこの地方の根本史料に対する手引として、第一に挙げるべきものであろう。なお、鉄道史関係文献としては、次のものがある。G. G. MacTurk, *A History of the Hull Railways, 1879*; G. D. Parks, *The Hull and Barnsley Railway, 1946*; M. E. Ingram, *The Hull and Barnsley Railway* (Railway Magazine, July, 1945); T. Sheppard, *Early Means of Transport in the East Riding* (T. E. R. A. S., xxvii)。このうち、最後のシムズのものには、駅馬車時代の叙述も含まれていて興味があるが、なによりもこの特異な地方史家の貢献に帰せらるべきは、ハル市ハイ・ストリートに近年開館を見た交通博物館 Museum of Transportation の開設である。R. S. Lambert, *The Railway King, 1934* は、地方出身の鉄道王シムズ・ハドソンの伝記 (cf. D. N. B., xxviii, 146)。英国の地方史家にとつて交通史関係が、どんな比重をもちつつあるか、その全体的な背景なし文献については、これ以上は、前掲小松教授の秀れた紹介に譲りたいと思う。

産業革命史研究の物的な指標が、いまいった交通史関係として、開花しつつあるとすれば、その思想史的ないし社会史的側面はどうか。当地方はそれについて、どのような文献を提示しているであろうか。いっまでもなく、その思想的側面は、非国教主義とくにメ

ンジスムの興隆であったと置きかえられぬ。これらについては、次  
章でも明らかにしたいが、とくに地方的興味を誘ふ文献として、  
次のものをあげて置く。The Journal of John Wesley, ed. N.  
Curnock, 8 vols. 1909-16; Letters of John Wesley, ed. J. Tel-  
ford, 8 vols. 1931; Nathaniel Snip, Journal of the Travels of  
a Methodist Teacher of the World, 1761-2, ed. H. Wood-  
cock, Sketches of Primitive Methodism on the Yorkshire  
Wolds, 1889 は当ライディングにのみ関するもの。一般に、十八世  
紀中葉の地方の教会生活に関しは、Archbishop Herring's Visi-  
tation Returns, ed. S. L. Ollad and P. C. Walker, 1743 (Y.  
A. S. Rec. Ser., lxxi, lxxii, lxxv, lxxvii, lxxix)、『オールド・イコ  
二年より五〇年に関する当地方の Archdeacon Henage Dering  
の日記 Yorkshire Diaries (Surtees Soc., lxy) が史料となる。地  
方で聞いた話であるが、かつては清教主義の牙城となったこの地方  
においても、現在では国教徒・非国教徒・カトリックはほぼ同数で  
あるという。とすれば、かの「カトリック解放令」の地方的結末に  
ついては、研究はまだ今後にのこされた課題であろう。

産業革命の思想的側面を、以上のものとすれば、次にその社  
会的側面は、ひとつには救貧法の問題である。現在、救貧法関係文  
献は、当ライディング約五〇の教区に保存されているといわれるが

(cf. M. W. Barley ed., The Parochial Documents of the Arch-  
deaconry of the East Riding, 1939)、『オールド時代の第一等の  
社会史料としようかろう。簡単ではあるが、要を得た研究書とし  
よう。』N. Mitchelson, The Old Poor Law in East Yorkshire  
(E. Y. L. H. S., no. 2) がある。F. M. Eden, The State of the  
Poor, 1928 も、第三巻はモーションの諸教区に多くの叙述が捧げ  
られている。レオナード・リンソン、ウエスタン・ホモンドラの業績  
には言及するまでもなかろう。また関連する賃銀史の研究としては、  
R. K. Kelsall, The General Trend of Real Wages in the  
North of England in the Eighteenth Century, Y. A. J., xxxiii  
がある。移民史の研究も、また待たれるべきである。A. F. Hat-  
tersley, Migration within the Empire, 1849-1949, History, N.  
S., 34, no. 122, 1949; do., British Settlement in Natal, 1950  
に若干地方移民の状況がみられる。産業革命以後における地方の変  
化、ことに排水事業の進行については、これも地方的観点からみれ  
ば重要であるが、概して研究は少ない。このような経済の沈滞その  
ものは、近・現代におけるライディング史を、色あせたものとして  
いる。政治の不活発は、従ってなおさらにひどい。かの「改革の時  
代」といわれた、産業革命期の政治史に、なんらの地方文献も指摘  
しえないのが、いささか淋しいのである。しかし、考えようによっ

ては、近代のライディング史は、ハル市の発展とともにある。われわれは、以下にハル、ベヴァリーといったこの東ヨークシアの二大都市の消長のなかに、長いこの地方の歴史のヒダを探ってみたい。地方史研究の常道として、積重ねられた数多くの市町村の研究もなっていないが、これらはひとまず省略することにする。

\* 小松芳喬「イギリス経済史の一言点——鉄道史研究の現況」『史学雑誌』七一の二一、昭、三七。

## 五 ハル・ベヴァリー市史文献

ハルといえば、大方の読者には、ロビンソン・クルーソーの出版地としての記憶がある以外、英国都市のなかでは、それほど目立たい記憶があるわけではなからう。しかし、このことは、この古い港市の過去の栄光を、なにごとか物語っている。現在でも、ロンドン、リヴァプールに次ぐ、英国第三の貿易港だといえ、もう少しは注目を引くかも知れない。ハル市の歴史と現状については、他所でも触れたので、ここでは繰り返すつもりはない。要するに、この町もそれ相当の歴史の光背を負っていることがいいのだが、ここでは、その叙述ではなく、文献的に別な角度から、これを眺めてみたい。一般に、ハル市を論じた最古のものとしては、書誌学的にはかなり有名な Abraham de la Pryme, *The History, Antiquities and Description of the Town and County of Kingston upon Hull, 1697-1700* (Landsdown MSS., no. 890, British Museum) がある。しかし上述のように、原稿のまま大英博物館にあり、まだ公刊されていない(写しはハル市 Central Reference Library にある)。ごく中古のものは T. Gent, *Annales Regionum Hullini, 1735* (reprinted 1869) があるが、現在の研究水準からいえば、これも好奇心の対象でしかない。しばしばいわれる、エドワード一世の建設都市という通念を排して、市史の研究を、学問的次元に乗せたのは、以下の諸労作であり、とりわけフロストの業績は、画期的なものであった。G. Hadley, *A New and Complete History of Kingston-upon-Hull, 1788*; J. Tickell, *The History of Kingston-upon-Hull, 1796, 1798*; C. Frost, *Notices Relative to the Early History of Hull, 1827*; J. J. Sheehan, *History of the Town and Port of Kingston-upon-Hull, 1864*。問題多し市の起源については、ゴットフリッドの近作 J. Bilson, *Wyke-upon-Hull in 1293* (T. E. R. A. S., xxvii) が参照するべきであろう。前にもふれたが、V. C. H. Yorks. のうち、ハル市の部分はまだ公刊されていない。

次に、ほう大な市文書の検索は、地方史家にとっては、切実な問題であるが、これについては L. M. Stanewell, *Calendar of the*

Ancient Deeds, Letters, Miscellaneous Old Documents etc., in the Archives of the Corporation, 1951) 及び「便利ナリスト」がみられる。俗に市文書は「じりじり」 Bench Book と呼び慣れられてゐるが、これをチーター期以後の文書が価値高く詳細である。全然公刊はされてないが、ただその第五巻(一五五五—一六〇九年)だけは、筆写されてハル市中央図書館にみられる。この港市の英國史上に占めた役割は、十六世紀後半に及ぶとされ、ペンニマン・ノート・キントク所蔵の Customs Accounts (E. 122 series) 及び Port Books (E. 190 series) の史料が発掘されて、初めは口目を見ることにならう。しかし、これには特になほ永久年月と困難な労苦を要する。したがって、商市である、由緒ある港市であるが、時代を遡れば、その研究は、Y. A. S., Ser. Rec. のなかで、The Early Yorkshire Woollen Trade: Extracts from the Hull Customs' Rolls, and complete transcripts of the Unger's Rolls, ed. John Lister, 1924 (Rec. Ser., kiv) があることは特記されてゐる。以下列挙するものは、これと近接な、現代への実業史に関するものであり、W. G. East, The Port of Kingston-upon-Hull during the Industrial Revolution, Economica, May, 1931; W. J. Davies, A Description of the Trade and Shipping of Hull during the Seventeenth Century,

1937 (unpublished M. A. thesis, University College of Wales); B. Hall, The Trade of the North East Coast (London Ph. D. thesis, 1933); E. P. Bates, A Note on the History of the Queen's Dock, Hull, 1931; J. Bellamy and M. Webb, The Foreign Trade of Humber-side: A Study in Post-war Trade Trends, 2 vols., 1952; J. Bellamy, Occupations in Kingston-upon-Hull 1841-1948 (Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research, vol. 4, no. 1); T. K. Gribbin, The Population and Employment of Kingston-upon-Hull and the Humber-side Area 1921-48 (ibid., vol. 2, no. 2); F. D. Kingender, The Little Shop (Bureau of Current Affairs, 1951); S. Marshall, History of Cooperative Development, Hull and District, 1951; B. B. Mason, A Brief History of the Origin and Progress of the Dock Company at Hull, 1835; H. E. C. Newman, Hull as a Coal Port, 1913; R. L. Smyth, Male Unemployment Problems, with special reference to Kingston-upon-Hull (Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research, vol. 5, no. 2, 1953); A. R. Tankard, Survey of Imports, Raw Materials and Synthetic Products with special reference to the Humber Area, 1936; W. Wright, The Hull Docks (Minutes of the

Institute of Civil Engineers, xii, 1874-75)。時代は前後するが、とくに最近ロンドンからの業績ととも、脚光を浴びたノーメンマンの貿易史について、ハル市関係文書として、次のものがあつた。Reasons offered by the Merchant Adventurers of England and Eastland Merchants residing at Hull, for the preservation of their societies and regulations, 1660 (Brit. Museum)。このほか、市の代表的実業キヤンパ社の他個別会社の社史もあつたが、これらについては省略する。

ハルはまた漁港である。かの日露戦争当時、ムルチック艦隊が東洋回航のみぎり、北海にハルの漁船を襲撃したことは、われわれの記憶にのこる。エピソードである。事実、近代におけるハル市の発展は、このワロール漁業の消長と歩みをともしたともいえる。地方史家が、地方の現実に関を接しているかぎり、漁業史が切実な問題であつたことも肯なえよう。次に、その代表的な文献を記しておきたい。T. Sheppard, Hull and the Fishing Industry (H. M. P., no. 153); J. Willis, Trawlermen's Town: the Story of the Lives of Trawlermen from Hull and Grimsby, 1940; W. Baron, An Apprentice's Reminiscences of Whaling in the Davis Straits, 1890; W. Baron, Old Whaling Days, 1895; M. Conway, No Man's Land: A History of Spitzbergen, 1906; C. E.

S. Harris ed., From the Deep of the Sea: Epic of the Arctic; being the diary of the late Charles Edward Smith; Surgen of the Whaleship 'Diana' of Hull, 1922; A. G. E. Jones, The Voyage of H. M. S. Cove, 1835-36 (The Polar Record, no. 40, July, 1950); J. Lesellie, R. Jamieson and H. Murray, Narrative Discovery and Adventure... and an Account of Whale Fishery, 1845; B. Lubbock, Arctic Whalers, 1937; H. G. Munroe, Statistics of the Northern Whale Fisheries from the year 1772 to 1852 (Journal of the Royal Statistical Society, xvii, 1854); T. Sheppard, Whaling Relics (T. E. R. A. S., xxii)。

最後に掲げたと思うのは、宗教・教育をはじめとして、いわばかつてなされた、ハル市研究の雑報である。いまでは人口約四〇万に過ぎぬ北英の一都市ではあるが、この雑文獻のなかにも、多面的な英国地方社会生活の、歴史のひとコマが分ればと思ふ。J. R. Boyle, Holy Trinity Church, Hull, 1890; J. Cook, The History of God's House of Hull, commonly called the Charterhouse, 1832; C. E. Darwent, The Story of Fish Street Church, Hull, 1899; P. Davis, The Old Friendly Societies of Hull, 1926; Brynmor Jones, The University of Hull (Nature, no. 174,

1954) ; J. D. Klingender, *Students in a Changing World* (Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research, vol. 6, nos. 1 and 2, 1954) ; J. Lawson, *Two Forgotten Hull Schools : The Foundation of Hull College and Kingston College, 1836* (Studies in Education, University of Hull) ; do., *Elementary Education in Hull in the 1850s* (ibid., vol. ii, no. 1, 1953) ; do., *Hull Grammar School in 1680 : The Curriculum and the School Register* (ibid., vol. ii, no. 3, 1955) ; J. O'Dell, *A Century's Story of the Baptist Church, George Street, Hull, 1904* ; M. Science, *Educational Development in Kingston upon Hull since the War* (Studies in Education, vol. 2, no. 2, 1954) ; J. Temple, *Hull Municipal Charities, their History and Abuse, 1878-82* ; W. H. Thompson, *Early Chapters in Hull Methodism, 1895* ; A. E. Front, *Nonconformity in Hull* (Transactions of the Congregational Historical Society, ix, 1924-26) ; W. Whitaker, *One Line of the Puritan Tradition in Hull* ; *Bowl Alley Lane Chapel, 1910* ; A. B. Whitby, *Hull Worthies, 1906* ; T. White, *An Enquiry into the Origin of the Hospitals, Almshouses and Other Charities of Kingston-upon-Hull, 1823* ; 以上は、宗教・教育関係の文献である。見わたる限り、ウリヤマン

システムの侵透が目立つ。北英、しかも港町という相対的な生活水準の低さが、この清教主義の近代的形態と、なんらかの親和力をもったものであらう。周知のように、ハルはコヴェントリに次ぐ、今次大戦の第二の被災都市である。瓦礫の山は、旧市街において、まだ必ずしもとり片付けられてはなかった。コヴェントリが、復興都市第一号として、花々しく都市計画に踏みだせば、ハルもまたそのあとを追わねばならぬ。この市史研究雑報のなかでも、ひとつのジャンルがあるとするには、それが建築史であることは偶然ではない。地方史家は、ウリヤマンでも眠ってはいるが、ようである。代表的著作として、Edwin Lutyens and Patrick Abercrombie, *A Plan for the City and County of Kingston upon Hull, 1945* がある。Development of Hull since 1800 (Liverpool M. A. thesis) ; I. N. Goldthorpe, *The Architecture of Victorian Era of Kingston upon Hull, 1955* ; G. Hutton, *Victorian Railway Station, being an account of the building of Hull Paragon* がある。こうした関連性を目のあたりにする。ゴトランド・ミンタムに拾った全への地方史は、J. Anderson, *Brief Outline of the History and Progress of Cholera at Hull, 1832* ; T. Blashill, *Evidences relating to Hull, 1903* ; J. R. Boyle ed., *Charters*

- and Letters Patent granted to Kingston upon Hull, 1905; do., Note on the Charter granted by King Edward the First to Kingston upon Hull, April 1299; do., The Hull Cap of Maintenance (T. E. R. A. S., iiii); F. W. Brooks, A Medieval Brickyard at Hull (Journal of the British Archaeological Association, 3rd ser., iv, 1939); C. Cain, ed., Strother's Journal, 1912; R. W. Corlass, Sketches of Hull Authors, 1879; J. C. Cox, Hull and Drivpole in the Thirteenth Century (T. E. R. A. S., ii); G. de Boer, The Evolution of Kingston upon Hull, Geography, xxxi, 1946; J. B. Fay, Wilberforce House, 1951; W. Gauntress, A Report into the Existing State of Corporation of Hull, 1834; A. A. R. Gill, Press Gang Times in the East Riding (T. E. R. A. S., xxv); J. H. Hirst, The Castle of Kingston upon Hull, (T. E. R. A. S., iiii); J. M. Lambert, Two Thousand Years of Guild Life, together with a full account of the guilds and trading companies of Kingston-upon-Hull from the 14th to the 18th century, 1891; Anna J. Mill, The Hull Noah Play (Modern Language Review, xxxiii, 1938); W. G. B. Page, Notes on Early Hull Authors, Booksellers, Printers and Stationers, 1930; T. Sheppard, The Evolution of Kingston upon Hull as shown by its Plans, 1911; do., The City and County of Kingston upon Hull, 1925; do., Hull's 'Old Times' Street (Museum Journal, Oct., 1935); do., The Evolution of the Drama in Hull and District, 1927; J. Sibree, Fifty Years Recollections of Hull, 1884; W. Sykes, History of the Streets of Hull, 1915; do., Hull and East Yorkshire Trademen's Tokens (T. E. R. A. S., xvii); J. Symons, High Street, Hull, 1826; do., Hullinia, or Sketches from Local History, 1872; do., Kingstomiana, being Historical Gleanings and Personal Recollections, 1889; C. S. Todd, Incidents in the History of Kingston upon Hull, 1869; J. Tavis-Cook, Notes relative to the Manor of Myton, 1890; do., Notes on the Origin of the Kingston upon Hull, 1909; W. Turner, A Modern Delineation of the Port of Hull, 1805; W. Woolley, A Collection of Statutes relating the Town of Kingston upon Hull, 1830; T. T. Wildridge, Old and New Hull, 2 vols., 1884-9; do., Hull Letters, 1890; do., Honorary Freedom of Kingston upon Hull, 1891; T. Wilkinson, Memoirs of His Own Life by Tate Wilkinson, Patentee of the Theatres Royal, York and Hull, 4 vols., 1790; do., The Wandering patentee, or the History of the Yorkshire



Theatres from 1770 to the Present Time, 4 vols., 1795.

次にスヴァリーに移さう。スヴァリーは、ライディングのほほま  
ん中から南寄り、いうまでもなく、当地方の古くからの首都である。  
バラといわれるものは、この地方では、当市とハルの東寄りハドン  
の町のみ。現在の人口は約一、五〇〇人、赤煉瓦の堆積のようなき  
びれた町に、町はずれのミンスターのみが、馬鹿に大きい。この中  
世の遺物と現在との対照、これこそ、近代の波浪が、当地方に何を  
意味したかを物語っている。<sup>④</sup>中世に有名なこの町の歴史として  
は、古く代表作としては次の二著がある。G. Poulson, Beverlac,  
2 vols., 1823; G. Oliver, History and Antiquities of Beverley,  
1829。ハウルソンは、前述したようにホルダーネス史の著者。市文  
書からの多くの引用を含んでいる。オリヴァーのものは、必ずしも  
批判的労作とはいいがたいが、脚註は充分に利用に価する。両著と  
も十七世紀で終っているが、そもそもまじった町の運命と無関係  
ではなきやうである。市史の学問的研究が、緒につくのは、中世・  
宗教改革時代の教育史で有名な、リーチの仕事を待たねばならな  
かった。次に掲げるのは、そうした文献である。A. F. Leach, Bever-  
ley Town Documents, Selden Soc., xiv, 1900; do., Hist. MSS.  
Comm. 16th Report, Beverley, 1900; J. Dennett ed., Beverley  
Borough Records, 1575-1821 (Y. A. S. Rec. Ser., lxxxiv, 19

33); W. Brown, Documents from the Record Office relating  
to Beverley (T. E. R. A. S., v); K. A. MacMahon, Beverley  
Corporation Minute Books (Y. A. S. Rec. Ser., cxxii, 1956)。  
このうち、マクマホン氏の近著は、十八・九世紀の市史料であり、  
新時代の市史に貴重な史料を提供している。

なんと聞いても、ミンスターとともに栄えた町であれば、研究と  
しては、やはりそれに関したものが多し。中世の collegiate church  
に關しては、A. F. Leach, Beverley Chapter Act Book (Sur-  
tees Soc., xcvi & cvii); do., The Innates of Beverley Min-  
ster (T. E. R. A. S., ii) があり、かの中世末農民戦争の、当市  
に与えた影響を論じたものとして、P. T. Fowler, Beverley  
Town Riots of 1381-2 (Trans. Roy. Hist. Soc., N. S., xix)  
なる珍らしい論文がある。教会建築については、The Antiquary  
(xxvii); Archaeologia (lv); Y. A. J. (xxiv); Architectural  
Review (iii) などに諸家の論文が見えるが省略する。ついでに「ト  
ンネルコート」については、J. C. Cox, Sanctuary and Sanctuary  
Seekers of Medieval England を、今この上掲の著者の「San-  
ctuary stone」を、指摘するに留まらう。元來、演劇史のよう  
な「モーク」[「モーク劇」]—それは現在でもなお行われている—  
の名称を想起するまでもなく、この地方はその発展に重要な役割

をはたした。かつては、ヨークと並んだこの古都の演劇史料については、E. K. Chambers, *The Medieval Stage*, 2 vols., 1925 年、簡明なコメントがみられる。

① 拙稿「英国地方史研究管見—イースト・ライディング素描」(『西洋史学』、四三号、昭、三四)。

② 「英国地方史研究文献」(『史林』、四三の六、昭、三五)。スヴァリー市の概観についても、註①の草稿を参照。→ドゥン

③ については、もう論じないが、これについては、これまた最近小松芳喬教授の言及がみられる。「中世イングランドにおける都市建設」(『西洋経済史・思想史研究』、一九六二、五、四五頁以下)。

## 六 家族史・伝記・新聞・地方小説

英国人は伝記を好むといわれている。どんなガラタタな人間でもこの国民は、生涯の最後は、自伝を書きのこして死んでゆきたくなくなるのだ、とドイツ人デイペリウスはいう。抽象と理念を好むドイツ人には、アングロ・サクソンの不思議な性というべきであった。この経験的即物的な国民には、絵もまた等身大の祖先の似像でなくては気がすまぬ。英国において、歴史学が系譜学とともに起ったのも決して偶然の結果ではなかった。筆者はなきに、英国地方史研究の発生が、地方的独立の伝統と不可分な関係にあったことを指摘した。<sup>①</sup>

家族史・伝記は、小にしては、そこにおけるさらに個人の独立であったともいえよう。ここにもまた、国民性のたくまざる一端がみられる。こうして、地方史はまた豊富な家族史・伝記によって点綴される。地方史研究文献を解題してきて、最後にこの点にふれないわけにはいかぬのである。

まず、ヨークシア系譜学のスタンダードな労作としては、J. Foster, *Pedigrees of the County Families of Yorkshire*, 3 vols., 1874。当ライディングについては、本書三巻に見られる。なお、直接間接ヨークシアに言及した書物としては、H. G. Harrison, *Select Bibliography of English Genealogy*, 1937; J. B. Whitmore, *A Genealogical Guide*, Harleian Soc., 1947; W. Clay, *The Extinct and Dormant Peerage of the Northern Counties of England*, 1913 には、ヘンリー・ロンドン・マ・ポールなど、当ライディング名族の記述を含む。地方出身大学人として聖職者関係の検索には、J. Foster, *Alumni Oxonienses*, 8 vols., 1550-1886 (1887-1892); J. and J. A. Venn, *Alumni Cantabrigienses* (pt. i, 4 vols., pt. ii, 6 vols.); C. H. and T. Cooper, *Athene Cantabrigienses*, 2 vols., 1856-61; Anthony Wood, *Athene Oxonienses*, 4 vols., 1813-20 などが不可欠なものである。次に代表的な伝記類を挙げて、R. A. Alec-Smith, *The Nat-*

sters of Hull (Country Life, cvii, 1950); H. Blundell, *Blundell of Liverpool, Lincoln and Kingeston upon Hull 1906*; A. S. V. R. Blunt, *F. rederick L. Blunt, Bishop of Hull, a Memoir*, 1913; J. R. Boyle, ed., *Memoirs of Master John Shawe*, 1882 (ハニイニキキナクノシテ教徒) V. Britain, *Testament of Friendship: The Story of Winifred Holtby*, 1940 (彼女にふしよび) 参見参照) R. G. Burnett, *Through the Mill: The Life of Joseph Rank*, 1945; W. Clowes, *Journals of William Clowes, a Primitive Methodist Preacher*, 1884; C. W. Collier, *An Account of the Boynton Family*, 1914 (拙著「管見」④『西洋史学』四五の関連記事参照) R. Coopland, *Wilberforce, a Narrative*, 1923 (まちはル市第一級の歴史上の人物、奴隸解放論者、上掲雑誌「四三三」の拙稿参照) C. Dixon, *Amy Johnson*, 1930; C. Dyson, *Fares Please!* (汽車時代のくまの「異国半」の回) J. S. Fletcher, *Yorkshiresmen of the Restoration*, 1921 (拙著「歴史」 De la Pryme ② 関十、四、五) W. Garner, *Life of John Garner senior, one of the early ministers of the Primitive Methodist connection*, 1856; N. Hall, *The Christian Philosopher triumphing over Death: a Narrative of the Closing Scenes of the Life of the late William Gordon of Hull*,

1850; N. Hall, *An Autobiography*, 1898; G. Handley Taylor, *Winifred Holtby, A Concise and Selected Bibliography together with some Letters*, 1955; Lord Hawkesbury, *Some East Riding Families*, 1849; G. C. Hasetline, *Great Yorkshiresmen*, 1932 (Marvell, Wilberforce ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦) L. S. Hunter, *John Hunter*, D. D., 1921; D. C. Huston, *Sir James Reekitt, a Memoir*, 1921; N. E. Ingram, *Leaves from a Family Tree, being the Correspondence of an East Riding Family*, 1951 (Grimston 参 参 参) J. King, *Memoirs of the Rev. Thomas Dykes*, 1949 (くまに世間ハニイニキキキの回) J. D. Legard, *The Legards of Anlaby and Ganton*, 1926 (ノガード家は当地方の旧家、ピューリタン革命中は議会派としてアンラビーに活躍。ノガード家文書にふつては「拙稿「管見」④参照」『西洋史学』四三、四六頁以下) J. Macdonald, *Memoirs of the Rev. Joseph Benson*, 1822 (参 参 参 参 参 参) H. Maleson, *A Woman Doctor: Mary Murdock of Hull*, 1919; C. Moor, *The Bygods, Earls of Norfolk, Bygod of Settringham, etc.* (Y. A. J., xxxi); M. C. F. Morris, *Benjamin Fawcett, colour printer and engraver*, 1929 (モリスの「人」 国際的な前世紀の版画家) J. O'Hara, *Men of the City. A Record of events connected with prominent*

citizens of Hull and District, 1913; W. Richardson, Some East Yorkshire Worthies, 1914; F. Ross, Celebrities of the Yorkshire Wolds, 1878; P. Saltmarsh, History and Charitulary of the Hothams of Scarborough 1100-1700, 1951 (キヤム家は、郡地第一の名族、革命をキサム家じのつは、前掲拙稿参照) J. Sigston, Memoir of the Life ad Ministry of Mr. William Bramwell, 1839; G. Shaw, Life of Rev. Parkinson Milson, 1893 (ノホビノホビ距離したメンニスト) H. E. C. Stapleton, The Stapletons of Yorkshire, 1897; A. M. W. Stirling, The Hothams, 2 vols., 1918 (研究史上重要なもの、キサム家文書じのじの、拙稿「管見」(参照『西洋史学』四五(四三頁) F. H. Sutherland, Marmaduke Lord Langdale of Holm-on-Spalding-Moor 1598-1661, 1926 (ランタマール家文書じのつは、拙稿「管見」(参照『西洋史学』四五(四二頁) W. F. Walker, Thomas Sheppard (T. E. R. A. S., xxiv); E. White, Winifred Holtby as I knew her, 1938; R. I. and S. Wilberforce, The Life of William Wilberforce, 5 vols., 1838; T. T. Wildridge, Armorial Bearings of Families connected with Hull and Holderness, 1886; R. C. Wilson, The Cliffords and Boyles of Londesborough (T. E. R. A. S., xiv, 1907)。

とじで、すでに地方的関心を越えた。ラ・ポール家(のちのサンキュート伯)のおよび革命の詩人アンドルー・マールケルの伝記となれば、すでに国民史的な叙述が要求される。前者については D. N. B. の記述を別として、次の著作を挙げて置いた。I. Huntley, The Romance of an East Riding Family, 1914; do., Ravenser and the Rise of the De la Pole Family of Hull, 1914; J. Tavis Cook, The Story of the De la Poles, 1888 (44年、ハンタリー氏がハンリッシュ・レノード・オニンス所蔵の同家文書の写しを、ハルス中央図書館に寄託したことを付記して置いた)。マールケルのものは実に多い。およそ当市が誇る人物の筆頭が、この詩人であることは間違いない。前記中央図書館が別冊として、この詩人関係の文書を保存して置いたことを想います。むしろ英文学史の課題であらうが、主な参考文献だけ記して置く。H. N. Margoliouth, The Poems and Letters of Andrew Marvell, 1927; P. Legouis, André Marvell, poète, puritain, patriote, 1928; A. B. Grosart, ed., The Complete Works in Verse and Prose of Andrew Marvell, 4 vols., 1872-5; W. H. Baguley and T. Sheppard, Andrew Marvell Trecentenary Celebration, 1921; H. Baguley, ed., Andrew Marvell: Trecentenary Tributes, 1922。最後の二書は、ローカルな著作といつても、最近のものといつても

Christopher Hill, Society and Andrew Marvell (Puritanism and Revolution, 1958) など、マーヴェルと関係深い生地ワインスタッドのゴルドチャード家については、N. J. Miller, *Winestead and its Lords, 1932*。最後にもうひとつ。スレッドミアアのサイクス家といえは、ヨークシア・ウォールズ地帯に傑出した、由緒ある家系である。不毛のウォールズにどのようにして改良農業を入れたかについては、これも前述した。『西洋史學』四五、五二頁)。以下は『家に関するもの』で、Shane Leslie, Mark Sykes: *his Life and Letters, 1923*; J. Fairfax-Blakeborough, Sykes of Stedmere, 1929; T. B. Brown, *Full Age: Sermon on Christopher Sykes, 1857*; G. Pryme, *Memoirs of the Life of Daniel Sykes, 1834*。以上、当地方の家族史・伝記の類を概観して、地方人のそれへの執念がどんなものが分ったかと思う。何某の伝記が、いかに多く同姓の何某によって書かれているかを思え。おそらくは、筆のすざびにかかれた玉石混淆のものであろうが、それはそれとして、ここに先にもいった英国地方史研究の特異な精神的風土があることを指摘しておきたい。

新聞が地方史家によって、どのように利用されるか、これについては、ウェスト・ライディングに関して書かれた佐藤明氏の好論がある。しかし、ヨークシア西部とちがい、産業革命の怒濤を経験

することも少なかったこの東部においては、よしやそれがあっても、われわれにとり、それがどれだけ魅惑的な史料であるかは問題だ。

Hull Courant は、確かめうる最も古いウィークリーだが、ハル市中央図書館にも、一七四六年八月一日、第三六八号をはじめとして、約九年間ほどのものがあるにとどまる。Hull Packet がこれに続き、刊行期間は、一七八七年より一八八六年まで。紙上では当地出身の、かのウィルバークスによる奴隷論争が盛である。

Hull Advertiser は、一七九四年創刊、選挙法改正の年までトリー系、ついでウィックに転身する。Hull Pockingham は、一八〇八年から四〇年まで、Hull and Eastern Counties Herald が一八三八年以来。しかしこれらもまた前世紀中葉からは、他紙にとってもかわられてゆく。こうした初期の新聞史料については、やがてマクマホン氏のインデックスがでることであろう。すでに、一七九四—一八二五年の Hull Advertiser のそれは、公刊済みである。

地方のイメージは、平凡な歴史研究よりも、小説家によって、より旨く伝えられる。もちろん、事実はこのさい問題ではない。しかし、そのようなイメージから、かえって地方の風土と問題の所在は、より鮮明にひらめくことがある、といいたいのだ。「ヨークシアもの」といえば、誰しも想起するのは、あのブロンテの作品である。

ただしウェスト・ライディングの生んだこの才能に、東では匹敵す

るものがないのが、いさむか淋しい。だが、いま数十年を経て、『嵐が丘』の叙景や人情ほど、たとえばあのウォールズの日々を、強烈に思い起させてくれるものがあるうか。イースト・ライディングの作品としては、*Oliver Onions, The Story of Ragged Robin, 1945*。これは十七世紀後半の一石工の物語り。歴史的には、全くの架空のことである。歴史的なドキュメンタリーとしては、すでに前述した *Marie Hall, Andrew Marvell and his Friends: a Story of the Siege of Hull* にまわるものはない。一八七三年六月から七四年九月まで、*Christian World* 誌に発表され、一九一〇年第九版では、地方史家 *J. R. Boyle* の序文を付している。いうまでもなく、清教徒革命下のハルに取材したもの。日記混合体の文章であるが、叙述は驚くほど歴史的事実に近い。時はいわば、市の全史を通じての英雄時代である。情熱孤独の魂マーヴェルに、清教的なアリスの愛を配し、この相思のきずなを党派対立に明け暮れる革命の流れが切断してゆく。ホザム、ヒルデヤードと地方の名族が登場し、それはまたクロムウェル政府、やがては王政復古の宮廷へと連結される。アリス——もちろんこれだけは架空の人物——の父リスターの邸は、いまもなおハル河に臨むハイ・ストリート沿いに、壮大なエリザ期の建物としてのこっている。あれを見、これを思いつつ、北英の夜長に一気に読み通してしまっただけの感激を、今も忘れることはできない。

*R. D. Blackmore, Mary Akeley, a Yorkshire Tale, 1880* は、フランバラ岬近辺の田園生活の忠実な描写。二〇世紀のドキュメンタリーとしては、*Winifred Holtby, South Riding* が特筆される。『モックンツもの』の検索には、たゞ *J. Beckwith, Yorkshire Historical Fiction, A Reader's Guide, 1947* といった便利なものもあるが、本書出版後発行された地方小説としては、なかんづく *H. F. M. Prescott, Man on a Donkey, 1952* を挙げておきたい。歴史小説としては、すでに確固たる地歩を築いているものであり、革命とやらんで、この地方がかって国民史上に大きな影を落した、かの「恩寵の巡礼」を題材としたもの。歴史学的には若干の反論が予想されよう。これはまた年代記体の文章である。しかし、破壊しつくされた、北部修道院のあとを訪ねてみれば、歴史家もまたこれくらいのイマジネーションをもつことが必要なのである。 *Herbert Nicholson, Sunk Island, 1956* もこの地方を扱ったもの。最近の文学活動は、*The Hull Literary Club Magazine* (のち *Humber-side* と改名) にみられる。最後に一言、美術史関係についてのべておけば、この地方がネーデルランド風海洋画家の一群によって、ユニークな作風を誇っていることを、付記しておきたい。かつて、レンブラントが、この町に画室をもったという、前掲マリー・ホルルの小説の一節は、美術愛好家でもあったディケン

ズ教授の言によれば、どうも怪しいといふことであつたが。

- ① 拙稿「英國地方史研究管見」(『西洋史學』四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三)。
- ② 佐藤明「イギリスにおける地方史研究—ウヰルム・マインツ・オウ・ミータシマのはまらう」(『西洋史學』四九、四九、四九、三三)。

\* レイフ・デイヴィズ氏からの最近の私信によれば、博士自身による十六・七世紀のハル市史が近く出るさうである。さうなれば、テューダー・ステュアート期のハル商業史研究としてはユニークなものを、われわれも得ることができなさう。

(注記) 略号は、そのとちがひである。

- E. Y. L. H. S. ... East Yorkshire Local History Society  
D. N. B. ... Dictionary of National Biography  
T. E. R. A. S. ... Transactions of the East Riding Antiquarian Society  
V. C. H. ... Victoria County History of England  
Y. A. J. ... Yorkshire Archaeological Journal  
Y. A. J. Rec. Ser. ... Yorkshire Archaeological Society, Record Series

(京都大学助教授)